

聖書日課 『からし種』 2025.7.6-7.13

<p>7月6日 (日) I コリント 11章</p>	<p>「それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです」(20節)。その場に集まっただけでは主の晩餐にならないという聖書の指摘に、イエス・キリストの体と血に感謝する主の晩餐は、配餐の準備に始まり片づけに終わることを思う。パンと杯を大切に設置する友、身を屈めて配餐する友、来られなくても覚えて祈っている友と「一緒に」集いたい。</p>
<p>7日 (月) I コリント 12章</p>	<p>「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」(27節)。本章では教会とそこに集う人を、体とその部分にたとえて、いろいろな観点から説明してくれている。だが、もっとも知らせたいのは、キリストがその体でもってあらゆる試練を経験してくださったことなのだろう。一人ひとりの痛みも、教会全体の苦しみもキリストは知ってくださっている。</p>
<p>8日 (火) I コリント 13章</p>	<p>「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」(4-7節)。私たちの求めるキリストのすべてがここに与えられている。アーメンと言うほかに、何を添えて語ることがあろうか。</p>
<p>9日 (水) I コリント 14章</p>	<p>「預言する者は、人に向かって語っているので、人を造り上げ、励まし、慰めます」(3節)。「預言」を「神から預かった言(ことば)を語る」働きであるとするれば、聖書を語る時、私たちは預言している。語るにも聴くにも、すばらしい聖書をくださった主への感謝をもって、みことばなるキリストによってともに造られ、励ましと慰めを分かち合いたい。</p>

聖書日課 『からし種』 2025.7.6-7.13

<p>10日 (木)</p> <p>I コリント 15章</p>	<p>「つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです」(22節)。旧約の最初で突きつけられた「アダムの罪」の問いに、新約は「キリストの贖い」で答える。これを示されたパウロの心の震えを想像する。「聖書は聖書に語らせよ」とも言う。問いを隠さず、でも辛抱強く、聖書を読み続けたい。</p>
<p>11日 (金)</p> <p>I コリント 16章</p>	<p>「わたしは、今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくない。主が許してくだされば、しばらくあなたがたのところに滞在したいと思っています」(7節)。長い手紙を書く。長い道のりを会いに行く。長い間想って祈る。パウロが教会の人々に関わっていく執念にも似た誠実は、旧約時代の神が、新約時代のイエスが、人々に関わられた誠実を思わせる。</p>
<p>12日 (土)</p> <p>II コリント 1章</p>	<p>「キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです」(5節)。今、心に苦しみのあるあなたへの聖書からの贈り物。この言葉を声に出して読み、黙して思い返し、痛む心に繰り返し塗り込んでください。これこそがきっとキリストの十字架の意味、救いの本質なのです。</p>
<p>13日 (日)</p> <p>II コリント 2章</p>	<p>「あなたがたは、その人が悲しみに打ちのめされてしまわないように、赦して、力づけるべきです。…ぜひともその人を愛するようにしてください」(7-8節)。教会に悲しみをもたらした人を巡るパウロの言葉。彼の最大の関心は、私たちの言動がキリストの愛、赦し、慰めに基づいているかどうか。「私たちの基(もと)はキリストなり」の告白に今日建てられていこう。</p>